

報告事項 キ

鳥取大学と鳥取県教育委員会との意見交換会の概要について

鳥取大学と鳥取県教育委員会との意見交換会を開催しましたので、その概要について報告します。

平成27年6月29日

鳥取県教育委員会教育長 山本 仁志

鳥取大学と鳥取県教育委員会との意見交換会の概要について

教育総務課

- 1 日 時 平成27年5月21日（木）午後3時～午後5時
- 2 場 所 白兔会館「飛翔東」の間
- 3 出席者 鳥取大学：学長、理事、副学長 他 計19名
鳥取県教育委員会：教育長、教育次長、次長
他 計15名



- 4 会議の概要（主な発言◇；鳥取大学、●；県教委）
（意見交換1）「鳥取大学附属小・中学校と鳥取県教育委員会との連携強化について」

●附属小・中学校と、教育委員会事務局が一緒にできることはないかと考えている。附属小・中学校は、鳥取県をリードする学校であり、モデルでなければいけないと思っている。今アクティブラーニングという言葉が一人歩きしているが、例えば附属小・中学校を授業参観し、「アクティブラーニングはこんなイメージだ」と思って帰れる。そういう授業づくりを、教育委員会事務局と一緒に入り行きたい。まずは、附属小・中学校の先生方と直接お話する機会がほしい。



●教育委員会が県下に取り組みを広げるとき、それを市町村の教育委員会に説明し、学級づくりなら学級づくり、スクラムならスクラムをやる学校ということで手を挙げていただき、そこで良い取り組みをしていただき、県下へ広げていく。しかし、本当はこれは一つの学校で全部できないとうまくいかないと考えている。鳥取県教育委員会と鳥取大学が考える理想の幼小中学校はこういうことだということを体系的に示していけるような学校を、お互い連携して作りたい。

◇今年度新たに「大学憲章」を作り、その6つの柱の中で、「附属学校は関係機関と一体となって教育に関する研究を進め、その成果を地域教育に還元しその発展に貢献します」と謳っている。研究校として、今までの附属学校は、地域、鳥取県が必要とする教育課題への共同研究という視点では、弱かった気がする。

◇附属学校には、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校があり、校務支援システムで、子どもたち一人ひとりについて、学びと育ちのプロセスを全て記録に残していくという取り組みを行っている。こういったことが、教育委員会で取り組んでいる「小中連携で取り組む授業改革ステップアップ事業」等と一緒に考えていけると思っている。また、そういう発達のプロセスを分析し、丁寧に追いながら、それを教育委員会の「学級づくり・人間関係づくり推進事業」とも連携し、アクティブラーニングといった学びができないか、とも考えている。

◇これらのことから、鳥取大学としても、教育委員会と共同で研究として取り組んでいくことができると考えている。

◇附属学校というのは先導的研究というのが1つのミッションだが、今までテーマは附属学校内で決めていた。それが、今回の会によって、県と共同で先導的研究のテーマを決めるというのは、非常に地方にとって新しいことで、非常に望ましいこと。

◎このことについては、今後、担当レベルで協議を進めることとなった。

（意見交換2）「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業～地（知）の拠点COCプラス～」の説明と高大連携について

◇鳥取大学は、平成25年度に「地（知）の拠点整備事業～COC事業」に採択され、現在の教育研究を絡めた地域貢献に協力、強く推進してきた。平成27年度に、新たに文部科学省から「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業～COCプラス事業」が公募され、それに申請する予定。一言で言えば、鳥取県内の産官学が一体となり、オール鳥取県で、鳥取県の雇用創出、若者定着に取り組み、それで地方創生を目指そうというもの。その中で、教育委員会と県内各高校、それから鳥取大学が、これまでの高大連携以上に関係を強化し、県内出身者の入学者を増やし、鳥取県で活躍できる人材を育成することが非常に重要となる。

◇農学部では、入試の改革を進めており、島根大学のような地域枠的なものの検討も始めている。一方で、卒業後も地域に残っていただくということを前提に考えると、ある程度特定の高校とタイアップしたような形で、一定の学力を持っている生徒を送っていただく、そういった連携教育にも近い形の入試ができないかと考えている。鳥取県はかなり就農に力を入れており、今までは公務員しかないという将来展望だったのが、だいぶ出口も見えてきたところ。

●県内高校生が国公立大学に向かう中、一定の割合で鳥取大学へ向かっている。しかしそれでも数値が低いというならば、さらに分析が必要。今は農学部でもスポーツドリンクを考えたり、工学部でも生物学的なことをしていたりしている。そういった情報を示しながら、もう今は文系だとか理系だとかなかなか言えない状態だという話はしつつある。

●鳥取大学に子どもたちを向かわせる動機づけという意味で、山形大学のニュースがあった。山形県も、高校を卒業した生徒が圧倒的に首都圏に流出してしまう県で、教育委員会と山形大学が協定を結び、アカデミックキャンプといった形で、2年生あたりを中心に山形大学を知っていただき、地元の国公立大学に向かわせようというアプローチをしているという記事を見た。鳥取大学もそのような手法をとられてはどうか。

●鳥取西高等学校が、スーパーグローバルハイスクールということで、鳥取大学とも、今後大きく繋がっていく。

◇先ほど意見交換した「附属学校との連携」と、この「COCプラス事業」の議論とは、実はすごく繋がっている。地域というフィールドで、アクティブラーニングやPBL（課題解決型学習）をすることで、地域に関する関心、愛着を子どもたちに植え付ける、呼び覚ますことになる。周りの大人が「鳥取には何も無い」と言っているのと、グループで地域の課題、魅力を探している作業をしているのでは、効果は全く違ってくる。なので、このアクティブラーニングやPBLの話は、地元定着、あるいはIターンの若い家族を呼ぶということに、実はつながっている。

